研究大学コンソーシアムの活動について 2020

研究大学コンソーシアム全体会議議長
山本　進一

研究大学コンソーシアムとは？

研究大学コンソーシアム（RUC:Research University Consortium）の概要

- 発足：平成29年8月4日
- 構成：研究力強化に積極的に取り組む大学の研究担当理事または副学長の集まりとして組織。現在は33機関で構成。
- 目的：研究力強化に取り組む大学及び大学共同利用機関法人（以下「大学等」という。）がコンソーシアムを形成し、各大学等における先導的取組や課題の発信・共有によりネットワーク化を推進するとともに、それら取組の全国的な普及・定着を目的とする。

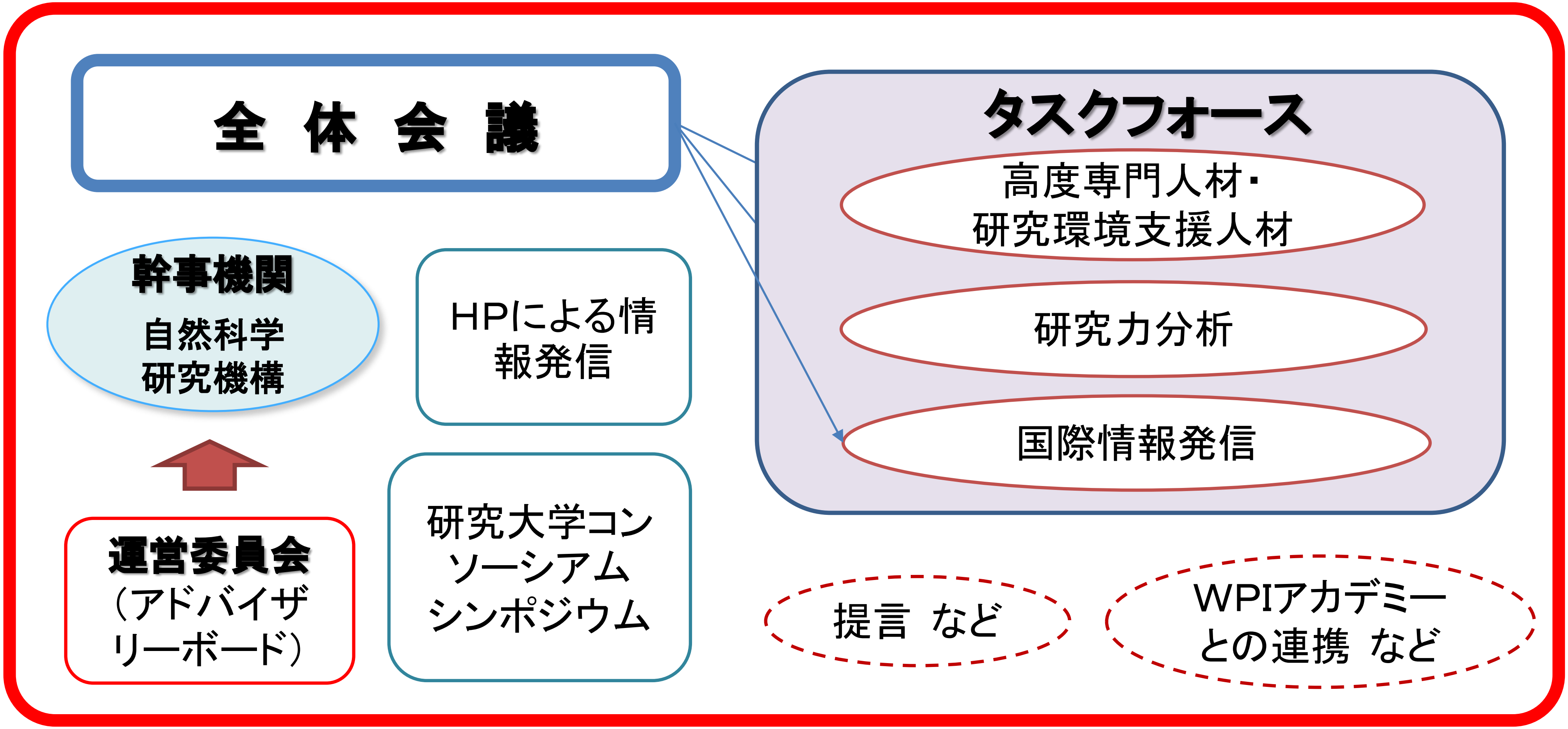
（「研究大学コンソーシアム規約」（平成29年8月4日 研究大学コンソーシアム全体会議）より）

- 活動：
  - 会議体での好事例の共有
  - HPやシンポジウムを活用した情報発信・共有
  - 各大学等における共通の課題等をテーマとして、タスクフォースを設置し、必要に応じ文部科学省の関係部局も交えるなどして、俯瞰的に討議

研究大学コンソーシアム構成機関

1	北海道大学	18	大阪大学
2	東北大学	19	神戸大学
3	筑波大学	20	岡山大学
4	千葉大学	21	広島大学
5	東京大学	22	山口大学
6	東京医科歯科大学	23	徳島大学　（２０２０年度加入）
7	東京農工大学	24	九州大学
8	東京工業大学	25	九州工業大学
9	電気通信大学	26	熊本大学
10	新潟大学	27	奈良先端科学技術大学院大学
11	金沢大学	28	東京都立大学
12	福井大学	29	早稲田大学
13	信州大学	30	慶應義塾大学
14	名古屋大学	31	自然科学研究機構
15	名古屋工業大学	32	高エネルギー加速器研究機構
16	豊橋技術科学大学	33	情報・システム研究機構
17	京都大学		

研究大学コンソーシアム 概要



※幹事機関を自然科学研究機構が担い世話役を務めるとともに、議論に際しては継続的な議論を行うようにつとめる。
※自然科学研究機構による運営にアドバイスをするアドバイザリーボードとして運営委員会を設置。

運営委員会構成機関 （計１０機関）

筑波大学	東京大学	名古屋大学	京都大学	大阪大学
岡山大学	九州大学	熊本大学	奈良先端科学技術大学院大学	自然科学研究機構

研究大学コンソーシアムの活動　全体会議

〇第５回（メール開催）

- 日　時：令和2年3月6日（金）～13日（金）
- 議題：
  - 〇2019年度活動報告及び2020年度活動計画について
  - 〇研究大学コンソーシアムの構成機関について
  - 〇大学におけるURAの今後の在り方について
  - 〇研究大学コンソーシアムの研究力向上に関するエビデンスについて
  - 〇研究大学コンソーシアムの今後に関するアンケートについて
  - 〇INORMS2020世界大会in広島におけるプレナリーセッションの企画・運営について

研究大学コンソーシアムの活動　運営委員会

○第７回
- 日　時：令和2年2月7日（金）　13:30～15:30
- 場　所：自然科学研究機構事務局会議室（東京都港区虎ノ門4－3－13）
- 議　題：○2019年度活動報告及び2020年度活動計画について
  ○大学におけるURAの今後の在り方について
  ○研究大学コンソーシアムへの参画について
  ○研究大学コンソーシアムの今後に関するアンケートについて
  ○INORMS2020世界大会in広島におけるプレナリーセッションの企画・運営について　等

○第８回（メール開催）
- 日　時：令和2年6月17日（水）～24日（水）
- 議　題：○研究大学強化促進事業の財源確保に関する要望書の提出について
  ○エグゼクティブセミナーの開催について　等

○第９回（オンライン開催）
- 日　時：令和2年8月5日（水）　10:30～12:00
- 議　題：○シンポジウムの開催について
  ○研究力強化人材育成ワークショップについて
  ○リサーチ・アドミニストレーター認定制度にかかる議論について
  ○エグゼクティブセミナーについて　等

研究大学コンソーシアム タスクフォース

（１）高度専門人材・研究環境支援人材の活用に関するＴＦ

目的：URAを含む高度専門人材・研究環境支援人材の活用について、補助金事業終了後も日本の研究現場への定着をはかるため、今後の、大学等への内在化、人材流動化、などについて、大学執行部の立場から、好事例やエビデンスの収集、必要な方策に関する情報共有・議論を行う。

（２）研究力分析の課題に関するＴＦ

目的：各大学の研究力の特徴を多角的な視点で把握するため、研究力分析指標を活用した研究IR、戦略立案に関して、各大学・研究機関における好事例ならびに必要となる関連情報・エビデンスの収集と共有を目的とする。

（３）国際情報発信に関するＴＦ

目的：とくに国際情報発信に関して、これまで、東京大学・京都大学と自然科学研究機構の国際広報担当者が中心となり、AAASのEurekAlert!に共同加入するなど国際情報発信プラットフォームをつくり、連携して日本の研究大学における国際情報発信をもりたててきた。これを引き続きこのコンソーシアムの中でタスクフォースをたて、プラットフォームの運営を行っていくとともに、国際情報発信に関する好事例等の情報共有をすすめていく。

（４）異分野融合ＴＦ（2020年度より）

目的：「異分野融合研究の推進」について、URAやIRerらによる議論を行い、異分野融合の取り組みの好事例を共有するとともに、異分野融合の研究IR、可視化、評価手法の検討や、異分野研究テーマリストの作成等の取り組みを実施する。

研究大学コンソーシアム　タスクフォース

研究大学コンソーシアム 3タスクフォース合同勉強会
（高度専門人材・研究環境支援人材の活用に関するタスクフォース、
研究力分析の課題に関するタスクフォース、異分野融合タスクフォース）

テーマ:「研究力強化に資するデジタルトランスフォーメーションの潮流」

URA の活動に資するデジタルトランスフォーメーションの推進については、研究大学コンソーシアムの多くの大学や研究機関が関心をもっているところ、3つのタスクフォースが合同で、「エビデンスを基とした分野や機関の枠を超えた共同研究推進のためのデジタルトランスフォーメーションの在り方」について、最新の動向を共有し、議論した。

日時:令和2年10月23日（金）13:30～17:00
開催方法:オンライン開催

プログラム
「研究大学強化促進事業」（文部科学省研究振興局学術研究助成課）
「e-CSTI を通じた科学技術政策の見える化」
（内閣府政策統括官（科学技術・イノベーション担当）付参事官　宮本 岩男）
「学内共同研究推進のための DX―異分野融合研究支援ツール CollaboMaker」
（東京工業大学 研究・産学連携本部 URA 井上 素子）
「How Elsevier supports information sharing within Research Communities」
（エルゼビア本社 モハメッド・アイサティ）
ディスカッション

研究大学コンソーシアム　コロナ禍への対応

○研究大学強化促進事業の財源確保に関する要望書の提出　（後述）
文部科学省研究振興局学術研究助成課とも相談し、コロナ禍におけるURAの安定的雇用のため、コンソーシアム構成機関全体への波及効果を想定しつつ、少なくとも研究大学強化促進事業予算の確保･拡充をお願いすることとし、高度専門人材タスクフォース等の構成機関の意見を踏まえた上で、要望書をとりまとめて提出した。

「新型コロナウイルス感染症災禍からの研究活動の再開と研究力の向上に必要な研究大学強化促進事業の財源確保に関する要望」（令和２年７月７日）

○『新型コロナウイルス』によるURA活動への影響に関するアンケートへの協力
（令和２年６～７月）
URAの活動が、新型コロナウイルスからの研究活動の再開と研究力の向上、及び「新しい研究スタイル」の実現において欠かすことが出来ないことを対外的に説明するため、文部科学省研究振興局学術研究助成課より協力依頼のあったアンケートについて、コンソーシアム構成機関のURA等に周知した。

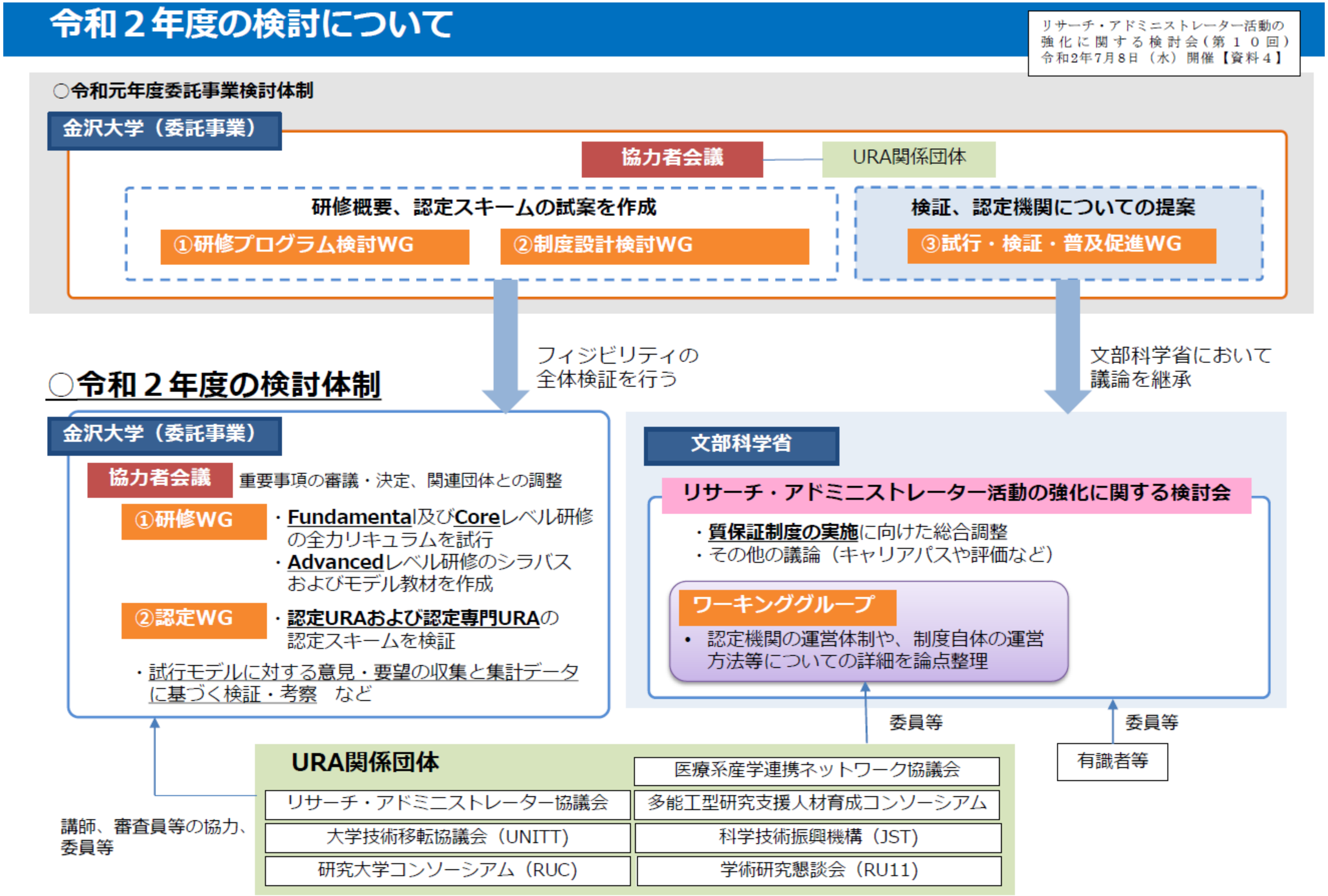
RUC Research University Consortium
研究大学コンソーシアム

高度専門人材･研究環境支援人材の活用に関するタスクフォース

座長
自然科学研究機構　客員教授
山本　進一

高度専門人材・研究環境支援人材の活用に関するタスクフォース

URA認定制度の検討（研修および認定）　文部科学省産業連携・地域支援課及び文科省委託事業（金沢大学）
（RUCからの参加者：山本全体会議議長、自然科学研究機構・小泉特任教授、東京工業大学・新田研究戦略部門長、岡山大学・宇根山主任URA）



来年度からの本格実施を目指している

「新型コロナウイルス感染症災禍からの研究活動の再開と研究力の向上に必要な研究大学強化促進事業の財源確保に関する要望」（令和２年７月７日）

https://www.ruconsortium.jp/site/introduction/452.html

研究大学コンソーシアム全体会議議長　山本　進一

　今般の世界的な新型コロナウイルス感染症の拡大により、現在、我が国の研究活動は著しい停滞を余儀なくされています。こうした中において、アフターコロナ／ウィズコロナの**「新しい生活様式」にも合わせた「新しい研究スタイル」への移行と、日本の研究大学群における研究活動の速やかな再開と研究力の向上が喫緊の課題**となっています。

　これまで、研究大学強化促進事業に採択された22大学等においては、研究戦略や知財管理等を担う研究マネジメント人材（URA（ユニバーシティ・リサーチ・アドミニストレータ）を含む）群の確保・活用による研究環境改革を組み合わせた研究力強化の取組を行うことで、世界水準の優れた研究活動を行う我が国の大学群の研究力向上に関わる取り組みを実施してきました。また、その取り組みは、本「研究大学コンソーシアム」を通じて、コンソーシアム参画33大学等において共有・協働することで、EBPMの推進やエビデンスの収集・分析、国際広報や産学連携などにおいて大きな波及効果を生み出しています。

今後、経済社会活動の再開を踏まえ、本事業による取り組みを通じて、我が国の研究大学群における「新しい研究スタイル」への移行、それによる研究活動の再開と研究力の向上について、スピード感をもって取り組まなければなりません。その際、各大学等の研究者チームの連携、さらに、産学連携や国際連携を維持し促進を図る上で、その効率的・効果的なマネジメントの中核を期待される研究マネジメント人材であるURAの存在は、欠かすことができません。**新型コロナウイルス感染症災禍からの研究活動の再開と研究力の向上に必要な「新しい研究スタイル」の実現においても、研究マネジメント人材としてのURAの役割は極めて重要**です。

具体的には、研究活動の再開と研究力の向上に必要な「新しい研究スタイル」の実現においても、以下の点で、URAによる研究マネジメントの支援が期待できます。

1.研究の企画立案から外部資金獲得、研究成果公開や産学連携・社会還元まで、全体を通じ一気通貫した研究マネジメントの支援
2.災禍からの速やかな研究活動の再開と更なる研究力の向上に向け、国際的な（研究）動向と研究力の分析を通じた、戦略性をもった研究企画立案支援
3.研究のリモート化・スマート化・デジタル化などに伴う、多点・多人数で構成される研究チームの運用マネジメント支援
4.社会課題解決にむけた社会との連携活動支援（産学連携を含む）
5.上記を通じた、研究者が研究に専念できる時間の確保

その一方で、我が国におけるURAは、現在定着を進めている新しい職種であり、雇用形態が任期付の形態が多く、その雇用経費の多くは、産学連携などの共同研究による間接経費や知的財産等収入などの外部資金に依存しています。我々は、研究大学強化促進事業の終了後を見据え、URAの機能により外部資金の獲得額を高め、その間接経費等をもって雇用経費を確保するというサイクルを構築することで、URA雇用の自主財源化を進めてきました。しかし、**これらの外部資金は、しばらく安定的かつ十分に確保することが困難になることが想定されます。**また、各大学等の運営費交付金等基盤的な経費についても、その限りある資源を、学生等への支援や、教育・研究環境のデジタル化・リモート化・スマート化等に更なる投資をしていく必要に迫られています。

我々はこうした経済活動の先行きに対する不安によって、**各大学等が構築を進めるURAによる研究マネジメント体制のとん挫、ポスト・コロナを見据えた研究力向上の取り組みの著しい停滞が起きることを危惧**しています。

そのため、研究大学コンソーシアム33大学等は、新型コロナウイルス感染症による災禍からの速やかな研究活動の再開と「新しい研究スタイル」への移行、日本の研究大学群の研究力の向上を図るためにも、**研究大学強化促進事業の予算の確保・拡充による、URAの安定的な雇用財源の確保を強く要望**いたします。

研究力分析の課題に関するタスクフォース

座長

大阪大学経営企画オフィス

菊田 隆

Times Higher Education世界大学ランキングに関する申し入れについて—研究力に関するランキング指標のより適切な運用を目指した要望— （2019年9月5日発出）

https://www.ruconsortium.jp/site/tf/344.html

以下の項目について、申し入れを行った（次ページ参照）。

１　THEと日本の研究大学群とのCommunicationの継続について
２　研究指標およびcitation指標について
- A) Citation指標について
- B) 論文の分数カウントについて

３ その他
- C) 論文指標等におけるFaculty数について
- D) Non-Englishジャーナル掲載論文の扱いについて
- E) ランキングの発表の方法について

Times Higher EducationのDuncan Ross氏から、
1）現在、THE世界大学ランキングのメソトロジーを考え直しているところ。⇒　2021年改訂予定
2）引き続きディスカッションしたい。⇒2020年8月にオンラインで実施（エグゼクティブセミナー）
3）いくつかの提案について考慮する。

との返答を得た。

2019 年 9 月 5 日

Times Higher Education 御中

Times Higher Education 世界大学ランキングに関する申し入れについて
―研究力に関するランキング指標のより適切な運用を目指した要望―

日本の大学における研究力の低下、論文生産の質（quality）・量（quantity）における日本の存在感の相対的な低下は深刻さを増しています。これまでにも増して、個々の大学において主体的な改革の努力を重ねることはもとより、URA (University Research Administrator)等の専門人材を活用した基盤的な研究環境の整備、国の科学研究費補助金などの研究費の充実など、国家の政策レベルで、適切な対応がとられることが急務となっています。

その際、大学の研究力を客観的にかつ冷静にエビデンスをもって把握することが重要です。大学の研究力の把握を、一つの指標からだけではなく、複数の指標を組み合わせることが重要であることは言うまでもありません。

その中、貴「タイムズ・ハイヤー・エデュケーション（Times Higher Education：以下THE）」の世界大学ランキングにおいて、日本の大学の順位は年々低下しています。もちろん、世界大学ランキングの順位に一喜一憂することは本末転倒ですが、この結果を単なる一過性の短期的な結果として受け止めるだけでなく、大学として、中長期的な研究力の向上や大学改革にむけた自己の取り組みに積極的に活かしていく必要があると考えています。

一方で、すでに多くの日本の大学や省庁等も把握している通り、大学ランキングにおいて、論文引用指標をはじめとする大学の研究力を評価する指標が決定的に大きな影響力を持っています。しかし、大学の研究力を、限られた指標で一面的に捉えることに対する不安と批判があることはご存じの通りです。限られた論文引用指数等を間違って適用してしまうと、各大学の研究力強化の実態とそぐわない、誤った評価となってしまうことを危惧しています。

私たち研究大学コンソーシアム（Research University Consortium of Japan, RUC）では、研究大学における学術研究の発展のため、これまでに様々な提言等の情報発信を行ってきました。4 年前には、前身の「大学研究力強化ネットワーク」(Research University Network of Japan) として、Times Higher Education 世界大学ランキングに対し、ランキング指標の改善に関する要望を提出いたしました。これによって、キロオーサーペーパー（Kilo-author paper）のカウントの仕方などで改善がみられたものの、重要指標である citation 指

標に関する要望など取り上げていただけなかったことは残念です。そこで、今回あらためて、Times Higher Education 世界大学ランキングに対し、研究力に関するランキング指標のより適切な運用を目指した要望を行うことといたしました。大学の研究力を一面的に捉えることの危険性の認識を共有し、冷静かつ適切な運用がなされるよう、要望いたします。世界的な視点で、研究大学とは何かについて多様な考え方を共有し、適切な対応をいただけるよう切に要望いたします。

研究大学コンソーシアム・研究力分析タスクフォース

（本件に関する問い合わせ）
担当：自然科学研究機構　小泉周　特任教授
03-5425-1301、nins-ura-jimu@nins.jp

申し入れ内容：

（1） 日本の研究大学群との Communication の継続について

4 年前に我々から申し入れを行って以来、日本の研究大学群としての情報交流は途絶えていた。我々としては、継続的な THE との相互コミュニケーションが重要であると考えており、今後、この申し入れをきっかけとし、相互の対話の場と信頼を構築していくことを要望する。

（2） 研究指標および citation 指標について

A) Citation 指標について

Citation 指標は、現在、平均化された FWCI（Field Weighted Citation Impact）のみに過度に偏重している。Citation の指標として FWCI（Field Weighted Citation Impact）を使って分野補正および国別補正した Citation の平均を評価指標に用いている。FWCI はこの目的のための優れた指標であり、今後も継続的に使用する必要があることに同意する。しかし、一方で、この方法では、ごく少数の一過的に極端な引用数を集める論文によって大学全体の FWCI が極端にゆがめられる可能性がある。FWCI だけでは、多様な研究の特徴を有する大学としての研究力を正しく把握できるものとは言えない。FWCI を用いるだけでなく、いくつかの指標を組み合わせることを要望する。

例えば、Citation 指標としては、FWCI 以外に、以下のような指標が考えられる。

A-1) Citation の評価に、FWCI（Field Weighted Citation Impact）の平均だけでなく、分野補正された Citation/研究者数も使用することもありえる。分野補正された Citation の総数（例えば、個々の論文の FWCI の合算値）を（FTE 換算した）研究者数で割った Citation/研究者数も FWCI と合わせて用いるほうが、より適切であると考える。これにより多様な特徴をもった大学の規模による補正ができるものと期待できる。

RUC Research University Consortium 研究大学コンソーシアム

A-2)　FWCI のような平均化した論文引用指数だけでなく、一定のレベルの質を一定の量以上もった「厚み」（ATSUMI, substantiality）のある研究力も評価されるべきである。「厚み」を評価する指標として、Top10%論文数のような、ある一定の優れた論文を一定数以上出せるかどうかも世界的な研究大学の研究力の指標となろう。そこで、Top10%論文数を研究者数に対してどの程度数発表されたかのカウントをする指標（Top10%論文数/研究者数）の導入も良い。

B)　論文の分数カウントについて

千人以上の多数の著者が名を連ねる Kilo オーサーペーパーの扱いを見直す対応は、歓迎する。ただし、数百人規模の著者の論文であっても、大型の機器を中心とした共同利用・共同研究の推進など国際的にも重要な研究体制の下で発表された論文を適切に評価することは必要である。複数著者による論文を適切に評価するため、すべての論文について、論文数および Citation を、論文著者の人数ないしは著者所属機関数によって分数カウントすることを要望する。

（３）Further considerations

C)　論文指標等における Faculty 数について

論文指標等の分母となる Faculty 数は、大学の自己申告が用いられているが、カウントの仕方など国際的に統一化されているわけではなく、これによってスコアが変わりえるのは問題がある。世界共通の客観的な基準に基づき、把握されるべきである。日本の大学群は算出方法についてあらためて確認するとともに、THE には、その徹底した運用を要望する。将来的には、第三者による客観的なデータベースを用いた Faculty 数の把握が求められる。

D)　Non-English ジャーナル掲載論文の扱いについて

それぞれ各国の母国語による論文など Non-English ジャーナル掲載論文は、そもそも対象としている読者が限定されており、世界的な引用の対象とはなりにくく、各言語の特性を踏まえた補正が難しい。こうした現状にあっては、英語論文と同等に研究力を比較するのは必ずしも適切とはいえない。そこで、Citation の分析については、たとえデータベースに掲載されている論文だったとしても、Non-English ジャーナル掲載論文を集計対象からはずすことを要望する。

E)　ランキングの発表の方法について

世界大学ランキングの結果を、大学の研究力の向上や研究環境の改善に資するために、Pillar だけではなく各大学の 13 項目の Score や、自大学の Score に変換する前の実データ値(Value)について、無償提供範囲の拡大を要望する。日本の研究大学群は THE の世界大学ランキングの作成に無償で協力しており、日本の大学の研究力強化に資するフィードバッ

p. 3

RUC Research University Consortium 研究大学コンソーシアム

クをＴＨＥからいただきたい。

また、順位だけでなく、ランキングされた大学全体の中でのパーセンタイル表記を併用してほしい。これにより、ランキングされた大学数が増えても、相対的な位置づけを知ることが出来る。

以上。

p. 4

北海道大学
東京農工大学
東京工業大学
名古屋大学
大阪大学（研究力分析タスクフォース・座長 菊田隆）
岡山大学
広島大学
九州大学
奈良先端科学技術大学院大学
情報・システム研究機構
自然科学研究機構

研究大学コンソーシアム エグゼクティブセミナー（2020年8月26日実施）
「研究大学の研究力の向上に向けて　研究力の現状分析と、世界大学ランキングの今後について」において、THE Duncan Ross氏が講演

来年度に予定されている指標の変更等について、検討状況の説明があった
おそらく、全体の30%を占めるCitationの指標については、FWCIのみならず、複数の指標が導入される模様（FWCI 75%などの導入などを検討とのこと）。
（内容については、日本語にしたものを後日共有予定）

RUC Research University Consortium
研究大学コンソーシアム

国際情報発信
に関するタスクフォース

座長

京都大学国際広報室長

今羽右左 デイヴィッド 甫

○以下のような会合を開催するとともに、メール等により検討・議論を行っている。

・EurekAlert! User meeting（２０２０年２月１５日）@AAAS年次総会会場

・Japan PIO Summit 2019（2019年11月25～26日）

大学や研究機関の研究広報担当者を主たる対象とした、Japan PIO Summit 2019（11月25～26日、北海道大学）を開催。

内容：　どのようにしたら広報の効果を測ることができるのか。日本の大学や研究機関は、国内向け・海外向けを問わず、より多くのプレスリリースや研究情報の発信を行うようになった。大学はそのような広報活動を最大限に生かし、基幹的かつ永続的な活動として組み入れる必要がある。広報担当者は、広報戦略を策定し、効果を計測し、改善し続ける必要がある。そこで、広報担当者や科学コミュニケーターが集まり、目標設定や効果計測について学び、議論するために、Japan PIO Summit 2019を開催した。

AAASによる英文プレスリリース作成支援サービス（NRAP）

EurekAlert!
The Global Source for Science News
AAAS

News Release Assistance Program

EurekAlert! is a non-profit, global science news consortium operated by the American Association for the Advancement of Science (AAAS). It disseminates science news to reporters and the public on behalf of scientific organizations worldwide. The News Release Assistance Program (NRAP) is designed to help Public Information Officers (PIOs) with limited resources or a small number of projects to pursue international media coverage through clear, concise and accurate news releases written by experienced science writers.

NRAPの契約をRUCとしてAAASと行い、RUC参画機関で活用。

使用希望の大学・研究機関は、座長ならびに幹事機関にご連絡ください。

RUC Research University Consortium
研究大学コンソーシアム

異分野融合
タスクフォース

座長

東京工業大学 研究・産学連携本部 研究戦略部門長

新田　元

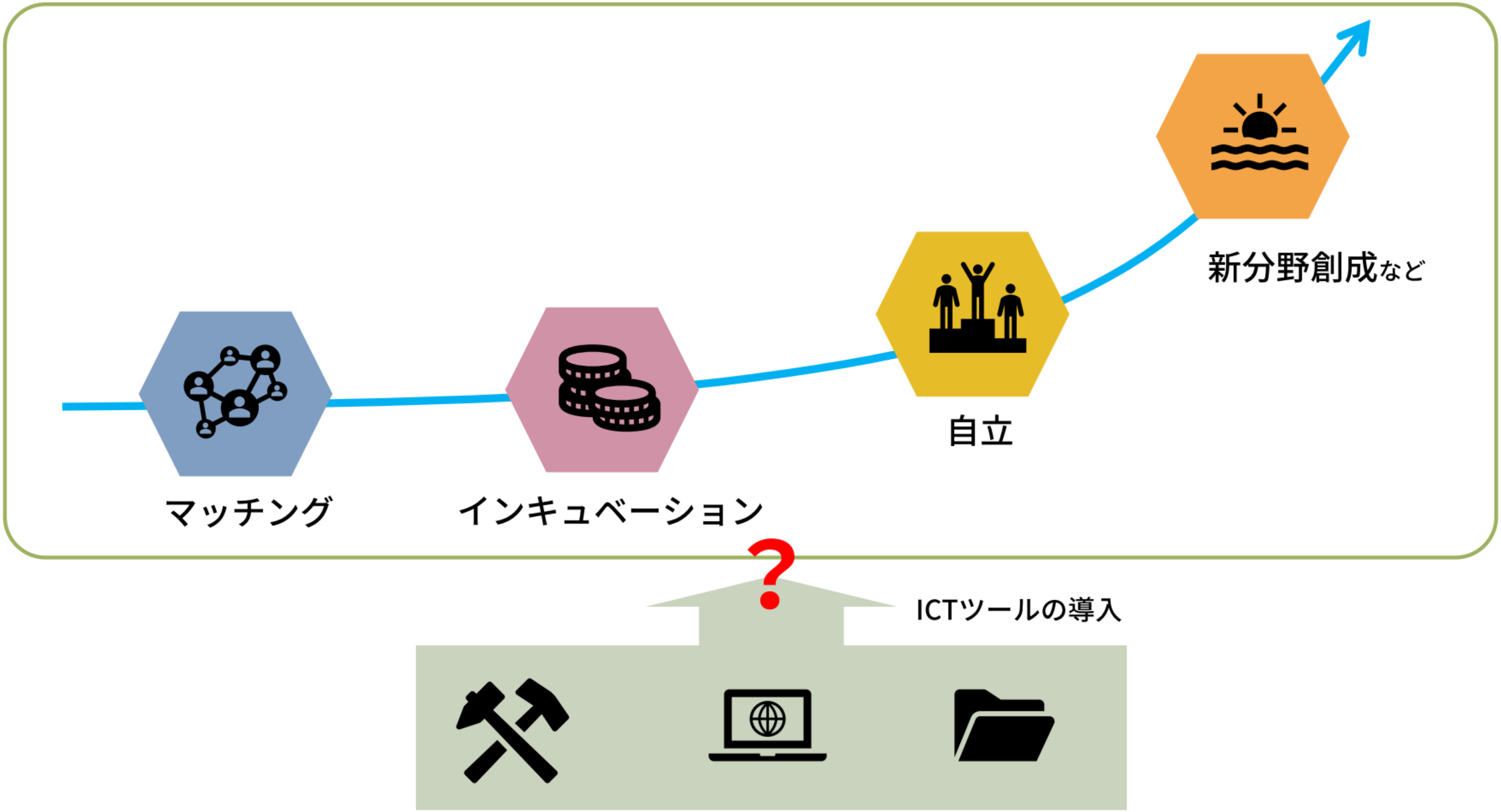
異分野融合タスクフォース

2019年度のRUCシンポジウムで好事例の共有と活発なディスカッションのあった「異分野融合研究の推進」について、4つ目の新たなタスクフォースとして立ち上げ、活動を開始した。

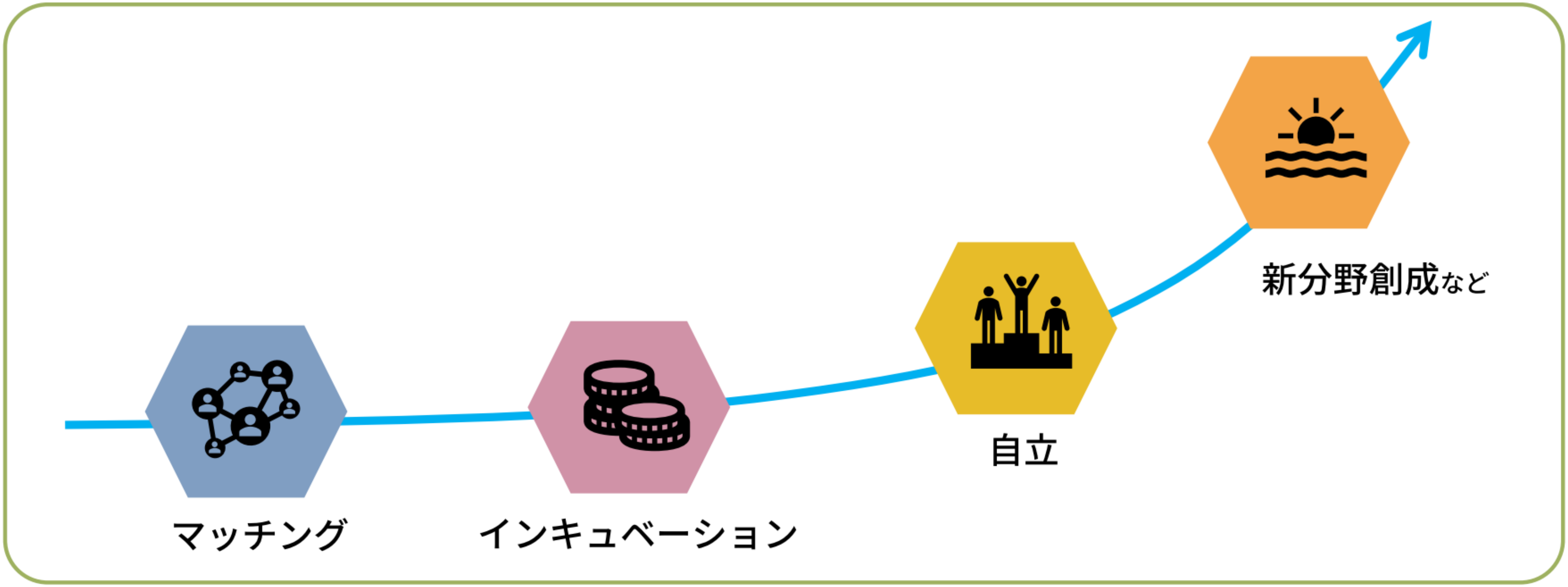
○第1回
日時：令和2年10月7日（水）13：30～15：30
開催方法：オンライン開催
・タスクフォース座長について
・エビデンスを基とした分野や機関の枠を超えた共同研究推進のためのデジタルトランスフォーメーションの在り方について

○第2回
日時：令和2年10月21日（水）10：00～12：00
開催方法：オンライン開催
・異分野融合二次元マトリクスを用いた各大学の取り組みの整理について
各大学の取り組みについて、「マッチ ング（出会い）」「インキュベーション」「自立」「新分野創成等」の段階にわけ、マトリックスをつくり整理した。

異分野融合 × DX？



異分野融合 × DX ！



DX Digital Transformation

- プロセス・業務そのものを変革する
  →より高い価値を生み出す

研究機関内
研究機関間

Step1：各機関の取組Map（作成中）

マッチング → インキュベーション → 自立 → 新分野創成など

マッチング
- 研究者交流の場
- 研究者交流システム
- ワークショップ支援
- 重点分野選定
- 個別支援
- URA交流の場
- 産業界とのイベント

インキュベーション
- 学内ファンド
- 研究資金情報システム

自立
- 研究ユニット
- 広報支援

マッチング～インキュベーション
- 資金・広報・研究会などの一体的な支援

仕掛け

データ

評価方法(KPI)

研究大学コンソーシアム　その他の取組

●「RUCエグゼクティブセミナー」「RUC人材育成ワークショップ」の実施

　これまで、研究大学コンソーシアムでは、各タスクフォースのテーマに関する勉強会等を実施するなどしてきたが、2019年度から、タスクフォースのテーマ以外でも、**研究大学群にとって有益と思われるテーマについては、研究力向上に寄与する取組を実施する。なお、実施にあたっての企画・運営は幹事機関において行うものとする。**

　2020年度は前年度に引き続き、以下の取組を実施することとする。

(1)RUCエグゼクティブセミナー(1回)

対　象：　研究大学コンソーシアム全体会議メンバー(理事・副学長等)
テーマ：　研究力強化へのEBPMの活用に関するもの

(2)RUC研究力強化人材育成ワークショップ(研修会)(2回)

対　象：　研究力強化に携わるURAや事務職員など
テーマ：　研究力強化へのEBPMの活用に関するもの

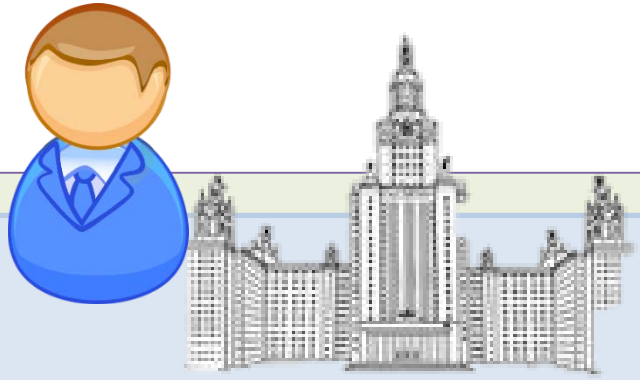
研究大学コンソーシアム RUCエグゼクティブセミナー
～EBPM的手法の検証・展開（RUCで実践）～

目 的

我が国の研究大学のエグゼクティブに向けて、国内外の研究大学等におけるEBPM的手法の取組・好事例を紹介し、今後のEBPMの取組を促進するとともに、各大学における研究戦略立案、研究力向上に資する。

対 象

研究大学のエグゼクティブ・URAなど



取組概要

1回開催　RUC（研究大学群として）

EBPMの実践に必要な3要素
1. エビデンスの収集と精査
2. ロジックモデルの構築
3. 目標に応じた適切な指標の設定

EBPMの実践とロジックモデルの構築に関わるセミナー

適切な指標設定に関する情報共有

研究戦略立案、ロジックモデルの構築、指標設定に関して、
海外の著名な有識者による講演、情報交換、勉強・研修などを行うセミナーを開催

研究戦略立案にむけたEBPMの実践的取組を支援　⇒　EBPMの取組の促進

研究大学コンソーシアム　エグゼクティブセミナー
「研究大学の研究力の向上に向けて
研究力の現状分析と、世界大学ランキングの今後について」

研究大学強化促進事業も後半5年の折り返し地点を迎えようとしている中、研究大学コンソーシアム参画の研究大学の研究力の現状を把握した上で、今後の研究力の向上に向けた取り組みや、いま指標改善の検討を行っている世界大学ランキングの今後の在り方について、ディスカッションしました。

開催日時：令和2年8月26日（水）13：30－17：10
開催方法：オンライン開催

プログラム

・開会の挨拶とイントロダクション
（研究大学コンソーシアム全体会議議長　山本 進一）
・講演
「日本の研究大学の研究力の現状と課題について」
（鈴鹿医療科学大学学長　豊田 長康）
「研究大学コンソーシアム参画機関の研究力の特徴」
（自然科学研究機構　研究力強化推進本部　特任専門員　壁谷 如洋）
「社会の変化に対応する新たなエビデンスの活用」
（エルゼビア・ジャパン株式会社　田原 花枝）
「THE Rankings 3.0　Our next generation of performance metrics」
（THE 世界大学ランキング チーフ・データオフィサー　Duncan Ross）
・ディスカッション

研究大学コンソーシアム　研究力強化人材育成ワークショップ
～EBPM的手法の検証・展開（RUCで実践）～

目 的

我が国の研究大学のURA及び事務職員に向けて、指標に関する基本的な情報を共有し、EBPM的手法に係る取組・好事例を紹介するとともに、今後のEBPMの取組の促進、URA-事務連携の強化・促進に資する。

対 象

研究大学において評価、IR等の実務にかかわるURA及び担当事務職員

取組概要

全2回開催　RUC（研究大学群として）

- 指標に関する基本的な情報の共有
- 連携体制等の好事例の共有
- 人材育成プログラム等の共有

EBPMの実践には、大学におけるスムーズな横連携「URAー事務連携」が重要

研究戦略立案にむけたEBPMの実践的取り組み支援 ⇒ EBPMの取組の促進、人材育成　URA-事務連携の強化、促進

研究大学コンソーシアム　研究力強化人材育成ワークショップ（令和２年度第１回）「広報活動による大学のレピュテーションの構築とその評価指標」（予定）

EBPMのエビデンスの一つとして、広報の評価と、Reputationの指標も考えられる。大学の広報活動による大学のレピュテーションの構築とその評価指標について、これまで国際広報TFでの議論を発展させ、ディスカッションする。

日時：令和2年中（予定）
開催方法：オンライン開催

内容（テーマ）：
1. what is reputation?
2. how is it built?
3. how is it measured?
4. report from last year's PIO summit
5. risks to reputation
6. research promotion in a crisis: coronavirus and preprints

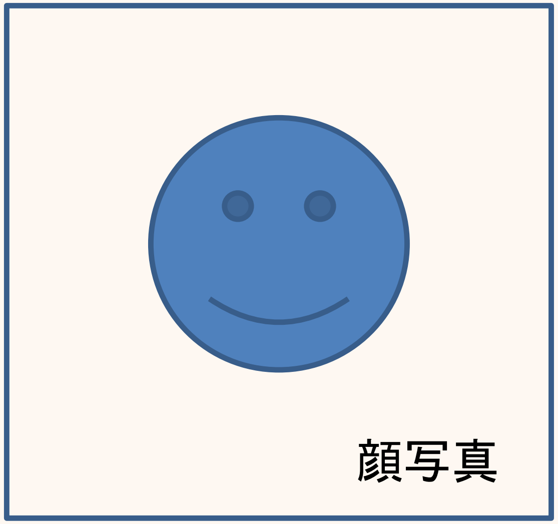
第2回も企画する予定　新型コロナ対応・BCP策定等をテーマとするもの（案）

各大学へのお願い

●研究力強化に貢献するURAの活動の可視化

・各大学におけるURA一人一人に焦点をあて、その活動をHPで紹介する。
・フォーマットを配布するので、そこに記載していただき、提出してください（各大学、URA1名を予定）。インタビュー記事としてRUCのHPにて紹介。
・年度内に完成予定。

○○大学・　○○URA　インタビュー

大学における業務について教えてください。
業務としては主に二本柱があり、・・・というプロジェクトを進めています。・・・

メッセージをお願いします。
分野によって違うのかもしれないけれど、特に若い研究者の方には・・・